

[巻頭言]

だますまいぞ！ だまされまいぞ！



京都大学 柴田 裕実

昨年、月の周回軌道に投入された日本初の月衛星「かぐや」から送られてきたハイビジョンの映像のすばらしさに感動された方がたくさんおいででしょう。その映像を一緒に見ていた友人が「いやあ、まるでコンピュータグラフィックス（CG）みたいだなあ」とつぶやいた。そう言われてみれば科学雑誌でみかける太陽系の惑星や衛星を描いたイラストのようでもある。CGによる画像は極めて現実に近い場合もあるかもしれないが、あくまでも作られたものである。もう一つエピソードを。1969年アポロ11号が月に着陸し、アームストロング船長が月面を歩いた話である。月から中継された映像を見て、それが現実の話だと、おそらくほとんどの人は思っただろうが、そう思わない人がいたらしい。科学者の中にも当時の技術でそのくらいの「でっち上げ」は簡単にできると信じて疑わなかった人がいたということだし、今もいるらしい。「でっち上げ」についての本が書かれたり、火星着陸という仮想のテーマを掲げて暗に月着陸の捏造をドキュメンタリータッチで描いた映画も製作されたりした。

近頃では「バーチャルリアリティ」という言葉がある。「仮想現実」と訳されているが、これは全く仮想の世界、つまり虚構の世界をCGなどによってあたかも現実にいるような感覚を実現したもの、あるいは現実のデータを基にできるだけ忠実に現実世界をコンピュータ上にCGによって実現し、実験や観測が難しく評価できないような現象をシミュレートしようというもの、の二種類が考えられる。科学雑誌やTVの科学番組でCGを駆使して体内のマイクロ組織やそこに作用する分子の図が描かれたりしますが、その原理や概念は正しいとしてもCGは明らかに嘘であるものが多い。しかし、この場合、捏造したわけではなく理解を助けるために嘘のCGを用いたので

あろう。然りとて人は既成の知識による思い込みやイメージに左右され、そこにある本質をなかなか理解することができないのではなかろうか。そのような時に描かれたCGを想像図だと思って見ていると、カッシーニ衛星が最近撮影した土星の輪のようにCGよりも実に細やかに綺麗な本物の写真を見せられたりするるのである。こちらがよほどしっかりしていないと簡単にだまされてしまう。

私たちの身近には「非科学」が「科学」の衣をまといながら闊歩していることが往々にしてある。「非科学」とは科学の概念に適合しないものというより、一見科学的に見せかけて解釈を施す「疑似科学やエセ科学」と、ここでは定義しておこう。例えば、皆さんよくご存じの「マイナスイオンは体に良い」とか「水からの伝言（水が人間の言葉に影響され結晶の構造が変わるといふもの）」といった類のものである。特に健康に関わる話が多いようである。このような話しを、「惑わされて」か、「積極的に」か、はわからないが、喧伝する科学者達が少なからず存在する。無視すればいいようなもののTVなどのマスコミに取り上げられるため社会への影響は計り知れない。私たち科学を営むものは自然の本質をしっかり見据えて、このような「非科学」に決して「だまされて」はならないし、当然のことながら「だます」側に回ってはならない。しかし、CGのように人は簡単にだまされるものだという事肝に銘じておかないと、本来排除すべきものであるのに、気がついたら「お先棒」を担いでいたということにも成り兼ねない。それは「捏造する科学」に通ずるものがあるのではないだろうか。

捏造とは有りもしないデータを用いて、あたかもそれを本物と思わせること、つまり虚構から現実を創り出し、世間を欺くことと言っても良いであろう。私たちにとって「虚構」と「現実」は紙一重のものかもしれない。科学自身は決して虚構の中に存在しないはずだが、往々にして人々の心を惑わすものは何であろう。

「決して、だますまいぞ、だまされまいぞ」

Do not deceive! Do not be deceived!
Hiromi SHIBATA (*Kyoto University*)
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL: 075-753-3354, FAX: 075-753-3354
E-mail: shibata@nucleng.kyoto-u.ac.jp